

事例から考える！ SDGsとの向き合い方

NPO法人eboard

子どもが「学びをあきらめない社会」へ。
「やさしい字幕」付きの学習動画を開発。

「SDGs」とは、「Sustainable Development Goals（持続可能な開発目標）」の略称であり、近年、学校現場でもSDGsをテーマとした教育が増えてきました。

今回は、第5回「ジャパンSDGsアワード」でSDGs推進副本部長（内閣官房長官）賞を受賞した、NPO法人eboardの代表理事・中村孝一さんをお招きし、子どもの教育機会を保障する同団体の取り組みについてお話を伺いました。



NPO法人eboard

2013年設立。「学びをあきらめない社会」の実現をミッションとし、オンラインで取り組める学習動画・ドリルを無料公開している。

ろう・難聴の子、外国につながる子などの教育機会を保障するために字幕付きの動画を制作した「やさしい字幕プロジェクト」は、第5回「ジャパンSDGsアワード」を受賞している。



代表理事
中村 孝一

セーフティネットとして オンラインの学びの場を用意

——「学びをあきらめない社会」の実現をミッションに掲げていらっしゃいますが、そのきっかけは何だったのでしょうか。

学生時代に学習塾や学習支援のボランティアをしていた際、勉強が遅れている子や不登校で塾だけで勉強している子に出会ったのがきっかけです。私がそういった子どもたちと過ごした経験がeboardの活動のベースになっています。

学習にハードルがある子どもが、学校の進度に合わせながらも、かつ学び直し等を通じて、基礎的な学力をつけていくという両輪を回していくのはなかなか難しいです。しかし、家庭の経済的な理由や自分や学校の事情で、学びからこぼれ落ちてしまったり、サポートがされなくなったりするようなことがあっても、「子どもたちには学ぶということをあきらめてほしくない」と思っています。学ぶという経験を通して、学習や進路に対する姿勢、自己肯定感などを育み、子どもたちの可能性や人生を切り拓いていっても

raitたいと感じていたので、そこは私も「あきらめたくない」という思いで取り組み始めました。

——「学びをあきらめない」一つの方法として、学習用の動画コンテンツをつくらうと思った経緯についてお伺いしたいです。

もちろん、学校現場でも子どもたちに対して支援がなされているのは理解していますが、やはりどうしても支援にもたどり着けない子どもやそこからこぼれ落ちてしまう子どもがいるので、セーフティネットとして、オンラインでそういう子どもたちが学べる場をつくることにとても価値があるのではないかと考えるようになりました。

大学卒業後、民間企業で働いて1年が経つ頃、MOOCs（ムークス、世界各国の大学の授業をオンライン上で無料で受講できる仕組み）が少しずつ発達していて、海外だとそれを子ども向けに展開するような活動も出てきていました。それを見たときに、「これこそ日本に必要な取り組みだ」と思い、eboardの活動をスタートさせました。



▲eboardの映像授業画面の一例。海外で進んでいた映像授業の取り組みからインスピレーションを得た。

学校の支援が追いついていない環境など、 さまざまな場面で活用が進む

——活動を始めた当初はどのような方々の間で使われることが多かったでしょうか。

初めて公立小学校に導入いただいたのが2013年で、中山間地帯の人口減少地域の学校でした。地方には塾が少ないので、子どもたちは基本的に学校しか学ぶ場がありません。それは悪いことではないですが、学校の学習から一度こぼれ落ちてしまったときのサポートの場は十分でないという課題がありました。そこで、いわゆる公設塾、放課後学習支援のような場でeboardを使いたいという問い合わせをいただいたのがスタートになっています。2014～2015年あたりはそういった放課後学習での利用、特に地方の放課後学習としての利用が多かったですね。



▲ろう学校や、地方の放課後学習など、さまざまな場面で使用されている。

——活動される中で、手応えややりがいを感じる場面はありますか。

活動を始めた当時は、YouTubeでさえ使っている人が少なかったのも、動画をアップしても誰も見てくれないような環境でした。しかし活動を始めて間もなくして、地方の学校

のパソコン教室で私が作ったeboardの動画を子どもが見て学んで、それによってできるようになっていく姿を実際に見たときに、「ああ、これは意味のある活動なんだな」と実感できたのを覚えています。

その教室では、動画を使ってみんなが自分のペースで学習を進めていて、授業の復習をする子もいれば、授業のペースに沿って進める子も、進んで予習をする子もいました。今でいう個別最適化ですね。もちろん動画だけではしんどい子もいるので、そういう子にはさらにサポートが必要なのですが、eboardの教材とそういったサポートの組み合わせで、その子に合った学習の仕方を用意できるんだという手応えを感じたのは大きかったです。



▲動画→ドリル、ドリル→動画のどちらの順番でも、個人に合ったやり方で勉強を進められる。

——はじめは放課後学習での活用が多かったとのことですが、現在はいかがでしょうか。

規模の大きい自治体ですと、予算や補助金を使いながら学習支援に力を入れていく施策も考えられるのですが、地方ではそういった取り組みがなかなか進みづらいので、学校以外の学習の場としてeboardを使ってもらったり、子ども食堂で使っていただいたり、学校でも家庭でもない第三の居場所で使っていただくケースが増えてきました。

2019年からはコロナ禍による休校やGIGAスクール構想の推進がきっかけとなって、オンライン授業として使っていただいたり、授業内でもいわゆる個別最適化・自由進度学習で使っていただいたり、映像付きのドリル教材として、授業後の復習に使っていただいたり、といったように使用場面は徐々に多様化しているように感じます。

ユニバーサルデザインとしての 「やさしい字幕プロジェクト」

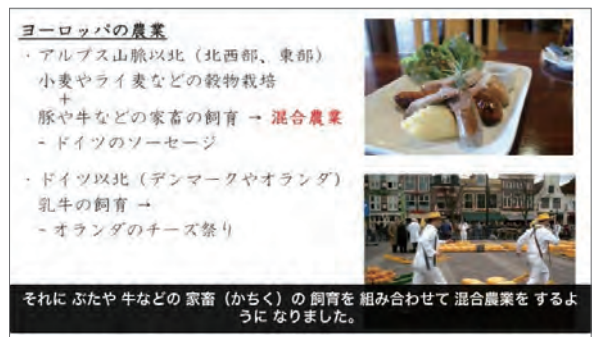
——SDGsアワードを受賞された「やさしい字幕プロジェクト」は、コロナ禍をきっかけに取り組み始めた企画とのことですね。単なる字幕ではなく、「やさしい字幕」にされた意図を教えてください。

字幕については、もともとろう学校から要望をいただくことは多かったのですが、コロナ禍で学校が一斉休校になっていた2020年3～5月に、ろう学校だけでなく、家庭や聴覚障がいをもっている子ども本人からも、多くの要望をいただいたことがきっかけになっています。休校期間は無償で公開されている映像コンテンツが多くありましたが、「世の中には映像の学習コンテンツがたくさんあるのに、ほとんど字幕が付いていなくて困っています」との声が聞こえてきたり、Twitterでもそういった投稿を見かけたりするようになりました。



聴覚障がいの方は、どうしても脳にインプットされる言葉の量が幼いときから少ないので、日本語の発達が遅れてしまうことが多いです。ろう学校高等部の子の日本語の読解力は、健聴児の小学5年生と同程度になってしまうことも指摘されており（長南・澤（2007）読書力診断検査に見られる聾学校生徒の読書力の発達『ろう教育科学』49、101-112）、ただ音声文字起こしするのではなく、簡単で理解しやすい日本語に変換した字幕を付ける必要がありました。

「日本語の言葉をよりわかりやすくするためのスタンダード（基準）として何があるだろうか」と考えていたときに、当時のプロジェクトメンバーから出てきたアイデアが『「やさしい日本語」（日本語があまり得意でない人にも伝わるよう、一般的な日本語よりもわかりやすい表現に言い換えた日本語のこと）を使う」というものでした。「やさしい日本語」を使用することで、聴覚障がいを抱える子どもだけではなく、他の障がいがある子や日本語に慣れていない外国につながる



▲「やさしい字幕」が付いた動画

る子どもにも広く使えるような字幕にしようということになったのが「やさしい字幕プロジェクト」です。

—— 字幕なしの動画で伝わる子どももいますが、「やさしい字幕」が付いたからといってその子どもたちが理解できなくなることはないですね。なるべく多くの人々に伝わる形にするという点では、「ユニバーサルデザイン」の考え方に近いものを感じます。

まさにそうですね。私は字幕がなくてもeboardの動画の内容を理解できますが、字幕があるとより情報が入りやすいので、常に字幕ありで動画を見ています。障がいのあるなしにかかわらず、私のように聴覚より視覚情報の方が認識しやすい人もいます。そういう点でおっしゃる通り「ユニバーサルデザイン」なのだと思います。

私たちの間では、字幕を付ける作業を「階段に手すりを付けるようなこと」とイメージしています。手すりがないだけでも全く問題ない人はいるけれども、手すりがあると初めて上れるようになる人もいます。なくてもよかったけれど、突然怪我をして手すりが必要になる人もいます。「特定の誰かをイメージして」というのではなく「そこにあることで、ある人は劇的によくなるし、またある人にとってはたまにちょっと助かる」、そういったニュアンスを「やさしい字幕」の「やさしい」に込めています。



▲手すりがあることで、階段を上れるようになる人もいます。

特別支援学級の場合には、eboardの動画を使って「思ったよりこの子って視覚で情報を集めているんだな」とか、「字幕があった方が学習内容にすごく集中できるんだな」とか、先生方が子どもたちの特性を改めて発見することもあるようです。

雑音が多い環境での学習に集中できないような過敏の子どもに対しては、あえて音声を消して映像と字幕だけで学習してもらうケースもあると聞いています。これは私たちも想定していなかった使い方、eboardの可能性がどんどん広がっているようでうれしいです。

—— 現在の学校は、集団での一斉授業が基本になっており、子どもが授業から少しでも遅れてしまうことは自己肯定感の低下を招いてしまうこともあるそうです。そんな子どもたちにとっては、「動画を見る」というシンプルな行為でも、「最後まで動画を見れた！」と思えることが、自己肯定感の向上につながっていくような気がします。

まさに私たちが掲げている「学びをあきらめない」というのは、「自分で学んでいく力をつけること」とつながると思っています。子どもたちにとって、「自分はこういうツールや手段があれば学べるんだ」という手応えを感じながら、自分に合った学び方をつかんでいくことはとても重要だと思っています。社会に出てからも人は学び続けていく必要があるという点を踏まえても、学校を卒業する際に「自分は〇〇を学んだ」という結果より、「自分はこうすれば学んでいけるんだ」という手段を知っている方が将来大事だと思います。



デジタル教材に対するとらえ方を問い直し、個別最適な学習へつなげる

—— SDGsアワードを受賞されたことについては、どうとらえられていますか？

eboardとして字幕を広めたいという思いがあったのはもちろんですが、手伝ってくださった多くの方により報告が



▲SDGsアワード受賞の様子

できるのがうれしい、という気持ちがいちばん大きかったです。また、審査員の方々にも、私たちが課題としてとらえていたものを同じく課題としてとらえていただいた、そこにおけるアプローチを評価していただいた、私たちの活動が意義があると認めていただいた、というとらえ方もできるかなと思っています。

—— eboardさんの活動について、今後新しく計画されていることなどはありますか。

近年、学習支援を受けられていない不登校の子どもが増えているという実情があるので、今後は、教材以外の部分でそういった子どもたちをサポートできるようなアクションを取っていききたいと思っています。

もう一つは、ICT教材に取り組んできた強みを活かして、外国で日本語を勉強するための教材づくりに力を入れていきたいと考えているところです。

—— 最後に、全国の先生方へメッセージをお願いいたします。

先生方は現在、ICT端末の導入によって対応に追われてしまうことが多いと思いますが、オンラインの学習コンテンツを「授業の中で使うツール、学力を上げるツール」とだけとらえるのではなく、「その子に合った学習を用意してあげられるツール」としてとらえることで、普段の学習がうまく進まない子どもに対する支援の糸口が見つかるのではないかと考えています。たとえば、今までは頑張って書いて学習していたけれど、タイピングでもよいと言われるだけで救われる子も、実はたくさんいるはずです。そういう視点でデジタルをとらえていただき、その中でもしeboardの動画がマッチする子どもがいれば、ぜひ活用いただけたらと思います。

eboardは多くの方からの寄付によって無償で動画を提供でき、民間企業ではなかなか難しいような取り組みにもチャレンジできています。もしeboardを使ってみて、「これはこれからの世の中にもぜひ残していきたい!」と共感してくださる先生がいらっしゃれば、ぜひ寄付という形で応援していただけると幸いです。

eboardの活動詳細は、ぜひ公式サイトでチェックしてみてください！

